

そこには懐かしい光景があった。果物屋のせがれとして生まれ育った私の実家の倉庫には、毎年11月になるとオレンジ色のコンテナに入ったみかんの山が、ところ狭しと積まれていた。当時の果物屋としては珍しく、信頼できる美味いみかん農家から、直接大量に買い付けていた事からそうなのだが、そのコンテナに入ったみかんを赤いネットに小分けに詰め替え、店頭に出せる状態にするのが小学生だった私の役割だった。両手に軍手をはめ、一個一個キズがないかを確認し赤ネットに詰める。掻き入れ時になると土曜日の午後や日曜日には、終日倉庫にこもって、ひたすらみかんの山を小分けにしていた。そこでの光景はある意味、私の原風景と言えるかもしれない。その光景が川上農園にあった。私は一瞬タイムスリップしたかのような錯覚に陥った。私の中で昭和が蘇った。

## 里山大穂

福岡県宗像市（むなかたし）。人口約9万7千人の地方都市が湧いた。2017年7月9日。「神宿の島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の世界遺産への一括登録が認められたのだ。その中心を担う宗像社は歴史も古く、全国に七千余あるという宗像神社の総本山である。従来、観光資源も豊富であった事に加え世界遺産の登録により観光客が増加、市内は賑わいを見せている。また福岡市と北九州市のほぼ中間に位置し、当初は北九州市のベッドタウンとして発展してきた宗像市だが、近年は福岡都市圏の発展に伴

い、その地理的条件の良さから福岡市のベッドタウンとして発展、人口が増加している。一方で、響灘、玄界灘に面し漁業や農業の一次産業も盛んである。市の中心部から南へ、福津市と宮若市と接する市境に大穂（おおぶ）という山間の集落がある。住んでいる人は200人足らず。以前は棚田や段々畑が広がっていた。明治の頃は養蚕が盛んで桑の木が至る所に植わっていたという。養蚕が下火になると、桑の木は果樹に置き換わっていった。川上農園はその集落で代々農業を営んでいて、現在の園主、川上直幸さん（70歳）の先代の直樹さんの時代にみかん作りを始めた。当時は近隣にある筑豊炭田の活況で、みかんは高級品として高値で売れていた。この地区に大きな屋敷が多いのは、その良い時代の名残だという。

## 20歳で承継

「私は農業が嫌いじゃなかったんですよ。学校の教師か車の整備士になりたいと思っていました」。川上農園の園主、川上直幸さん（70歳）は少年時代の思いをこう語った。「小中学校時代に素晴らしい教師に出会ってね、その影響が大きかったようです。機械をいじるのは今でも好きですね。そのどちらかに就きたいと思っていましたね」。しかし、川上家の長男として生まれた直幸さんに選択の余地は残されていなかった。農業高校を卒業後、当時、神奈川県平塚市にあった農水省の園芸研究所で2年間学び就農の準備を整えた。

20歳になった直幸さんは、実家に戻り就農、みかん農家を継いだ。ところが驚いたことに父親の直樹さんは就農したての20歳の直幸さんに、経営から何から全てを任せたと。「最初から自由にできました。途中で、父親が口を挟むことは全く無かったですね」。多くの生産者の後継者がそうであるように、技術の継承や長年の経験則、手法を引き継ぐ事で代替わりを経験するものだが、こうも簡単に手放せるケースは極めて稀である。「いやー、父親の判断は素晴らしいと思います。ただ、私は未だに引き継いでいませんが・・・」直幸さんは少し頭をかきながら当時を振り返った。

## あるべき姿へ

直幸さんが就農して3年程は一般的な慣行栽培でみかんを栽培していた。「綺麗なビカビカのみかんを作って、東京の市場に送る為に農業をたっぷり使っていましたね。それが当たり前の時代でした」。ところが転機が訪れた。就農して4年目の年、みかんが全国的に大豊作となり価格が暴落したのである。当時、国のみかん栽培を奨励。みかん農家が急増し生産量が増えた事が仇となった。「正直な所、赤字になりました。このままではいかんとか危機感を持ちましたね」。直幸さんは即行動に移した。自らが市民生協を立ち上げ、チラシ配布などの地道な活動を開始。直売などの販売先の多角化を模索する中で、直幸さんはある事実を突きつけられた。

「今までの作り方では特徴がない」。他の生産者と同じ物では買い叩かれるだけ。何か特徴を出さなければならなかった。

そこで思い至ったのが有機無農薬でのみかんの栽培である。当然ながら当時は、今以上に有機無農薬栽培事例が少ない。周囲に実践者は皆無だったという。自分でやってみるしか方法が無い。しかし、この方法を選択する事に殆ど迷いは無かったという。というのも、20歳の頃から当時社会問題であった水俣病などの公害問題に関心を寄せ、積極的に関わっていた。また、当時ベストセラーとなった有吉佐和子の複合汚染という小説が、環境汚染問題について社会に警鐘を鳴らしていた。「20歳の時に参加したサークル活動で、全国から集まった多様な人達と関わり、環境汚染などの社会問題に目覚めた事が大きかったですね。その背景があったので、有機無農薬を試してみようという気持ちになりました」。

## 誇れるみかん

とは言え、これまでとは全く異なった栽培方法に恐れはあったという。「最初は手探りです。農業をどれくらい減らしたら良いのかわからなかったので、とりあえず畑の端っこの一部だけを無農薬にしてみました」。極めて賢明な判断である。「そうしたら至る所に蜘蛛の巣ができてね、その蜘蛛の巣が関所ようになって害虫を食べてるんですよ！感動しました。そしてね、初年度から思いの外で良かったですよ！びっくりするくらい。味も良かったで

す！」。直幸さんは嬉しそうに当時を振り返った。その後、販売先と話し合いながら徐々に無農薬での栽培面積を拡大していった。しかし、生産量と販売量の調整がつかず三分の一を捨てざるを得なかった年もあったという「畑の床一面がオレンジ色になりました」。そんな苦い経験を積み重ねつつも試行錯誤しながらこのやり方を推し進めた。

当初3年程は無農薬を続ける事ができたが、徐々にみかん特有の病気の発生が重なり、現在では通常の三分の一以下の減農薬栽培で落ち着いているという。私もこれまでの取材で多くの果樹農家さんから話を聞いているが、果樹でこのレベルは極めて驚異的である。夏場の草刈り、病気や害虫対策、最近では塩害や獣害対策も含め、どれだけの手間と労力をかけているか想像に難くない。「みかんはね、中身にキズがつくとそれを治す為に自分の糖分を使うんですよ。だから収穫や選果の時は生卵を扱うように丁寧に作業しています。そうしないと水っぼいみかんになってしまいます」。収穫後の選果にまで手間をかけている、そのこだわりが感じられる。「おかげさまで、美味いみかんができるようになりました。甘いみかんというよりは、コクがあって美味いみかんです」。直幸さんは胸を張ってそう答えた。

## 信念の裏付け

1980年代になるとアメリカ産オレンジの自由化が現実味を帯びてきていた。直幸さんは36歳の頃、アメリカの農業視察に行った時の驚きを今でも覚え

ている。「規模がね二桁違うんですよ！百倍以上です。飛行機から種をまくんですね」。アメリカの大規模農業に圧倒されたという。いくら日本の農業が規模を拡大したところでこのスケールには到底及ばない。自分たちが生き残るには狭い面積でありながら、安全できめ細かく、手間を十分かけた美味しいものを作る事だと直感したという。さらに、1986年4月26日、海外視察でモスクワを訪れていた際、チェルノブイリの原発事故に遭遇した。この時、直幸さんは日本政府から帰国制限されたという。「私達を汚染物質として扱うんですよ」。服は没収され、チェルノブイリに近いキエフを訪れていた人は帰国後、東海村で除染処理を受けたという。海外でのこのような体験は、安全安心で手間をかけた美味しいみかんを作るという直幸さんの信念をより強固にさせた。



© 2017 Sone City. All rights reserved.



特集

みかん

川上農園

文：梶原圭三  
写真：川上和碩